

八尾市文化財調査報告32
平成6年度公共事業

八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ

1995. 3

八尾市教育委員会

はじめに

高安山をはじめとする美しい山並みのふもとに位置する八尾市は、生駒山地を隔てて東は大和に接し、西は河内潟を望む所に位置し、古代からの交通の要所であり、豊かな稔りの地として発達してきました。

新聞紙上を賑わすような数々の発掘成果がそのことを物語っていると言えましょう。調査により得られた多くの資料はこれからを生きる歴史として、将来に渡り、引き継いでいくべき貴重な遺産であります。

本書は平成6年度に行った遺構確認調査の成果をまとめたものであります。本書が歴史研究の基礎資料として利用され、八尾市の貴重な埋蔵文化財を理解していただく一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたり、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成6年度に八尾市教育委員会が公共事業等に伴い、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会文化財課(課長　溝川博由)が各事業主体に協力を求めて実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財課技師米田敏幸、道　斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。
5. 現地調査、報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。
藤田典子（非常勤嘱託）
安達志津子、池田茂樹、片山武志、清水妙香、福井幹祐、藤中貴子、堀本昌弘、松島賢治
横山妙子、横山典子、米原洋文
6. 本書の作成にあたっては、米田、道、吉田が執筆・編集を行い、文責は文末に記した。

本文目次

1. 太田遺跡（94-149）の調査	1
2. 萱振遺跡（94-281）の調査	3
3. 東郷遺跡（94-369）の調査	6
4. 中田遺跡（94-312）の調査	10
5. 中田遺跡（94-311）の調査	16
6. 東弓削遺跡（93-298）の調査	18

図版目次

図版1 太田遺跡（94-149）	調査地全景
図版2 太田遺跡（94-149）	第1調査区全景
図版3 東郷遺跡（94-369）	第1調査区SD1検出状況
図版4 東郷遺跡（94-369）	SD1遺物出土状況
図版5 中田遺跡（94-312）	第3調査区断面
図版6 東弓削遺跡（93-298）	第3調査区遺物出土状況
萱振遺跡（94-281）	第5調査区遺物出土状況
図版7 東郷遺跡（94-369）	第7調査区遺物出土状況
図版8 東郷遺跡（94-369）	第1調査区韓式土器出土状況
太田遺跡（94-149）	第2調査区遺構面（東から）
図版9 東弓削遺跡（93-298）	弥生土器出土状況
図版10 東弓削遺跡（93-298）	出土遺物
図版11 東弓削遺跡（93-298）	第3・5・7・12調査区出土遺物
図版12 東弓削遺跡（93-298）	馬下顎骨
中田遺跡（94-312）	SD1出土遺物
	第4・5層出土土器
	第4・5層出土土器
	第4・5層出土埴輪
	第9層出土弥生土器
	出土遺物
	出土遺物

1. 太田遺跡（94-149）の調査

1. 調査地

太田3丁目183

2. 調査期間

平成6年7月28・29日

3. 調査方法

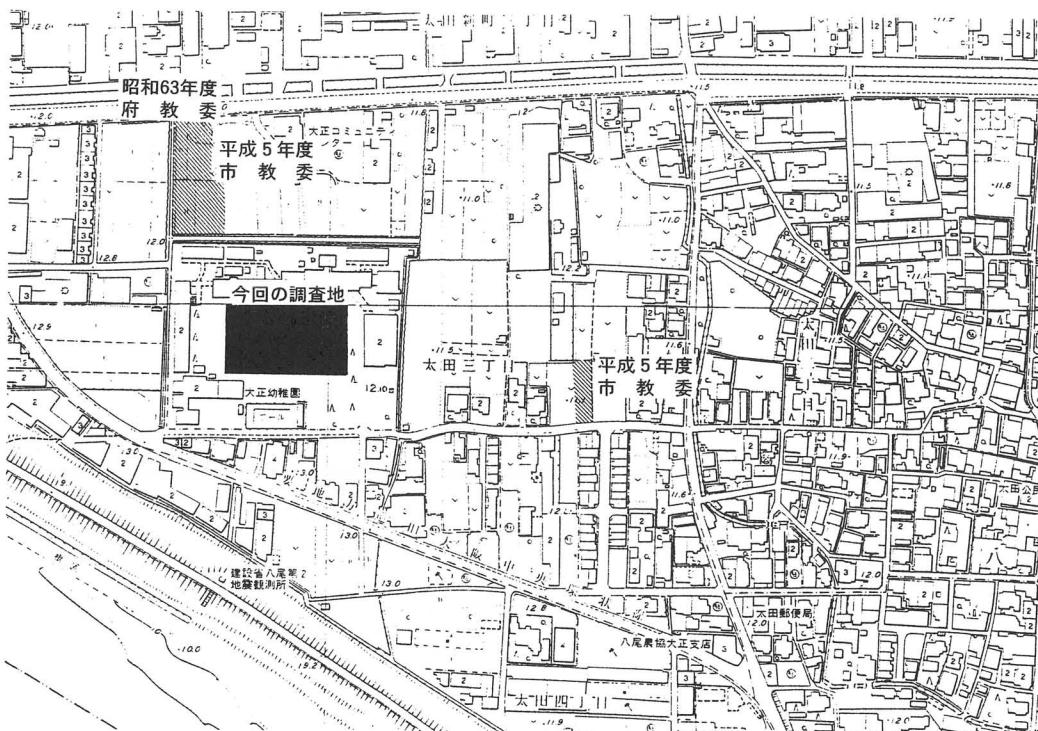
遺構、遺物の有無を確認する目的で、小学校校庭内の南東～北西を縦断する形で、 2×2 mの調査区を8箇所設定し、管路掘削底の地表下0.7mを目安にして調査を実施した。調査は機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影・実測等を行うことにした。

4. 調査概要

各調査区とも盛土・旧表土以下に僅かに包含層の痕跡がみられたが、第1調査区を除いて顕著な遺構・遺物の出土はみられなかった。

第1調査区においては、地表下0.5～0.6m以下に存在する暗灰褐色粘質土層より顕著な遺物の包含が認められたため、南東方向に約8m調査区を延長して精査を行ったところ、平安時代に属する遺物を含む南北方向の溝状遺構を検出した。

溝状遺構（SD1）は、幅約1.5m、深さ約0.5mを測るもので、溝内か



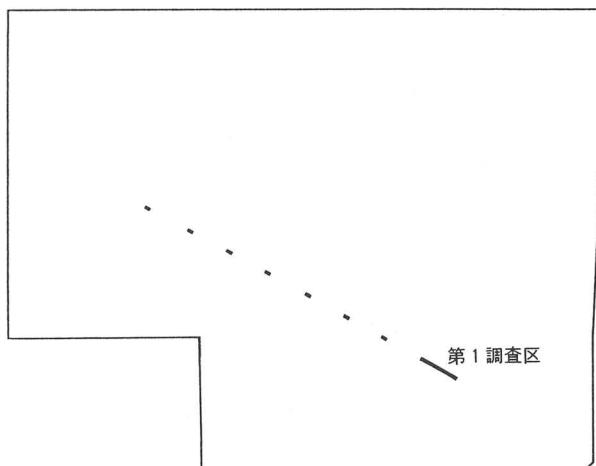
第1図 調査位置図 (1/5000)

らは、平安時代中期（10世紀末～11世紀前半頃か）の黒色土器碗のA類と甕が出土している。

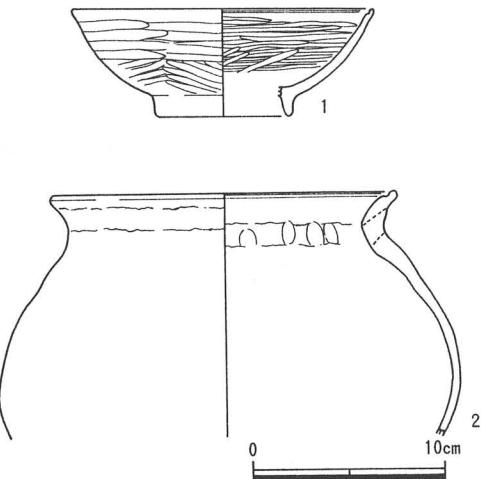
5. 調査結果

当該地では、僅かではあるが弥生時代～平安時代の遺物包含層を確認し、平安時代中頃の遺構を検出した。太田遺跡内においては、未だ充分な調査がなされておらず、遺跡の性格についても未解明な部分が多い。調査できた範囲は僅かではあるが、本遺跡の性格を知るうえで数少ない手掛かりになる資料であろう。

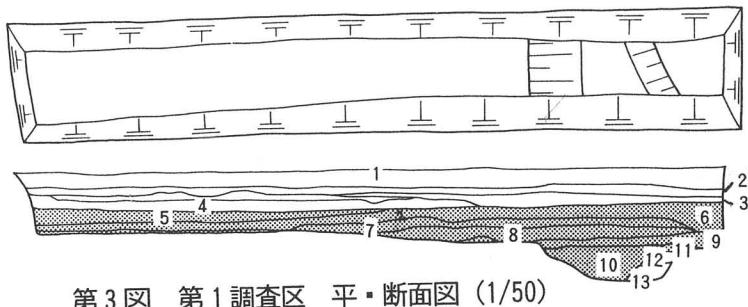
(米田)



第2図 調査区設定図 (1/2000)

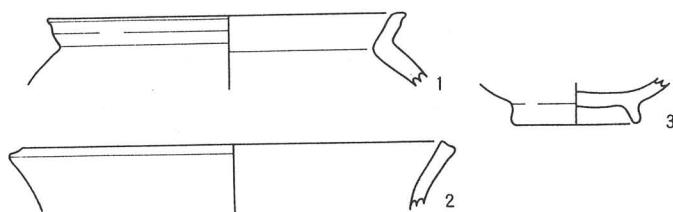


第4図 SD-1出土遺物実測図 (1/4)

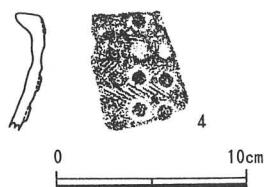


第3図 第1調査区 平・断面図 (1/50)

- 1 盛土
- 2 旧耕土
- 3 淡灰色褐色粘質土
- 4 淡灰黄色砂混り粘土
- 5 淡灰茶褐色砂混り粘土
- 6 暗灰褐色粘砂
- 7 暗灰色粘質土
- 8 暗灰茶色粘質土
- 9 暗黄褐色砂混り粘土
- 10 暗灰色粘土 (SD-1)
- 11 黄褐色砂質土
- 12 灰白色粘砂
- 13 暗灰色粘砂



第5図 包含層出土遺物実測図 (1/4)

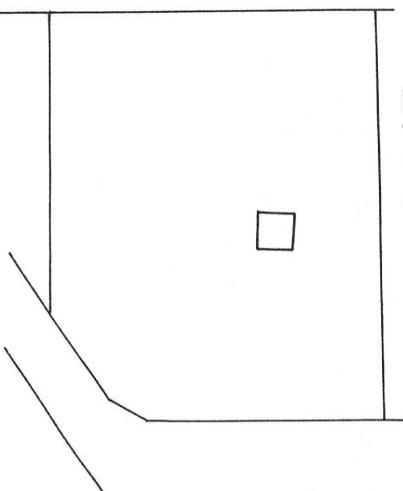


2. 萱振遺跡（94-281）の調査

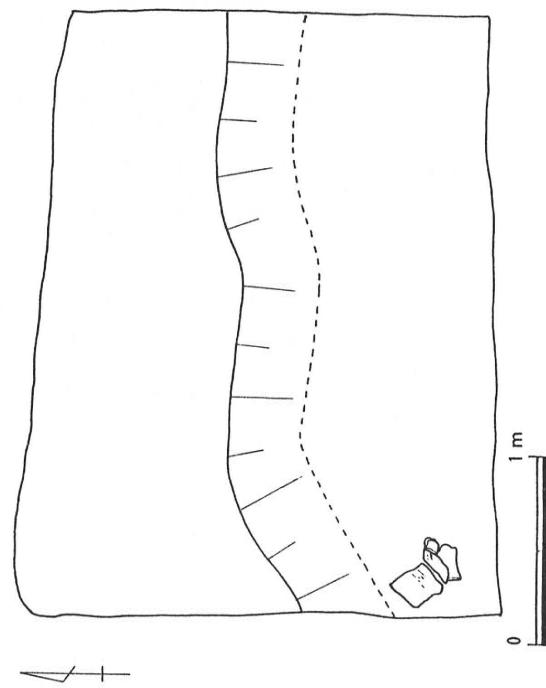
1. 調査地 旭ヶ丘4丁目25
2. 調査期間 平成6年8月11日
3. 調査方法 防火槽設置予定地内に3m四方の調査区を設定し、地表下2.9m前後まで、重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 地表下2.1m前後の褐色斑灰黒色粘土層上面で溝または土壤状の北側肩部分を検出した。深さは検出した最深部で0.26mを測り、埋土は褐色斑灰色粘砂層である。この埋土内からは6世紀中頃の須恵器の甕が1個体分、調査区の西壁でまとめて出土した他、土師器小片が出土した。溝状遺構がきりこむ褐色斑灰黒色粘土層は北へいく程高まっており、この土層中から、須恵器杯身、杯蓋の小片や土師器の甕片などが出土した。須恵器杯身は田辺編年のTK43～TK209に位置付けられるものである。また、この溝状遺の埋土上面からは土師器、須恵器の小片（綠釉陶器の小片1点(2)）がまとまった位置で検出した。この下は更に下層確認を行なったが、地表下2.7m前後までシルト層の堆積であり、これより下は灰白色粗砂層の堆積であった。



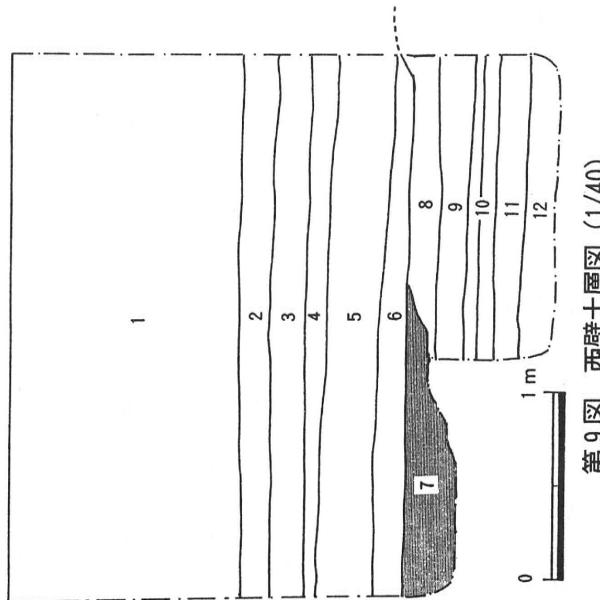
第6図 調査地周辺図 (1/5000)



第7図 調査区設定図

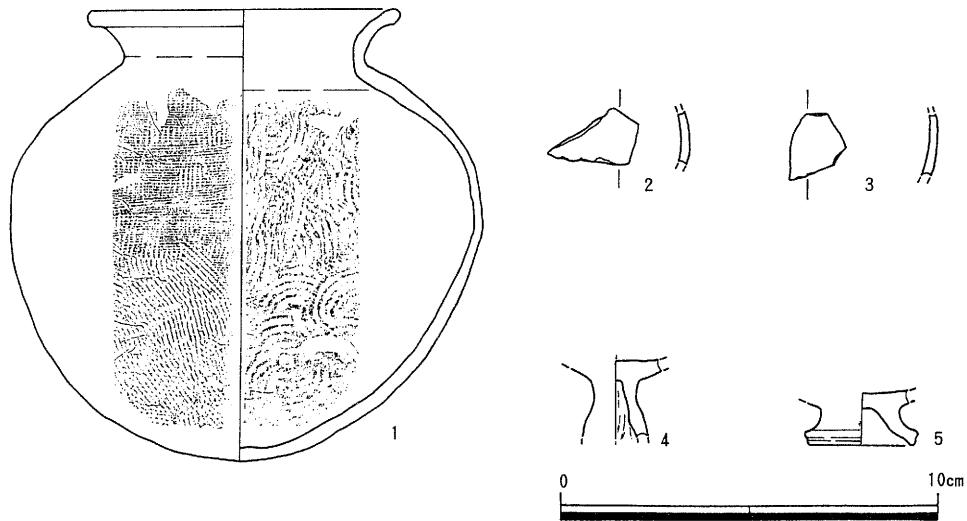


第8図 溝状遺構平面図 (1/40)



第9図 西壁土層図 (1/40)

- | | |
|----|-------------------------|
| 1 | 盛土 |
| 2 | 耕作土 |
| 3 | 綠灰色粘砂層 |
| 4 | 綠灰茶色粘砂層 |
| 5 | 茶褐色斑灰茶色粘砂層 |
| 6 | 茶褐色斑灰色粘性砂層 |
| 7 | 褐色斑灰色粘砂層 (古墳時代後期溝状遺構埋土) |
| 8 | 灰黑色粘土層 |
| 9 | 褐色斑灰白粘性シルト層 |
| 10 | 褐色シルト層 |
| 11 | 灰青色シルト層 |
| 12 | 灰白色粗砂層 |



第10図 出土遺物実測図（1／4）

5. 出土遺物

コンテナ1／3箱程度の遺物が出土した。このうち、遺構などに伴って出土したもので、実測の行い得たものについて、概述する。1は球体の体部に外反する口縁部がつく。口端部は丸く肥厚する。外面は格子状タタキのちにカキメを施す。口径は16.4cmを計り、器高は23.5cm前後である。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好、胎土はやや砂粒を含む。2は緑釉陶器の小片である。軟陶であり、釉調は濃緑色を呈し、素地は灰白色である。5は2とともに出土した須恵器の壺の脚台片である。底径5.6cmを計る。色調は暗灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は精良である。4は灰黒色粘土層から出土した高杯の脚部片である。内面にシボリメを残す。色調は淡赤橙色を呈し、焼成はやや軟質、胎土はやや粗い。3は廃土内から出土した青磁小片である。

6. まとめ

今回の調査では、地表下2.1m～2.2mで、6世紀代を下限とする可能性のある包含層である灰黒色粘土層を確認した。さらに、その面の上面で6世紀代の遺構面を確認した。また、この面の遺構である溝状遺構の埋土上面は平安時代の遺構面となる可能性をもつ。今回の調査成果は従来の萱振遺跡の範囲を拡げるものであり、重要である。

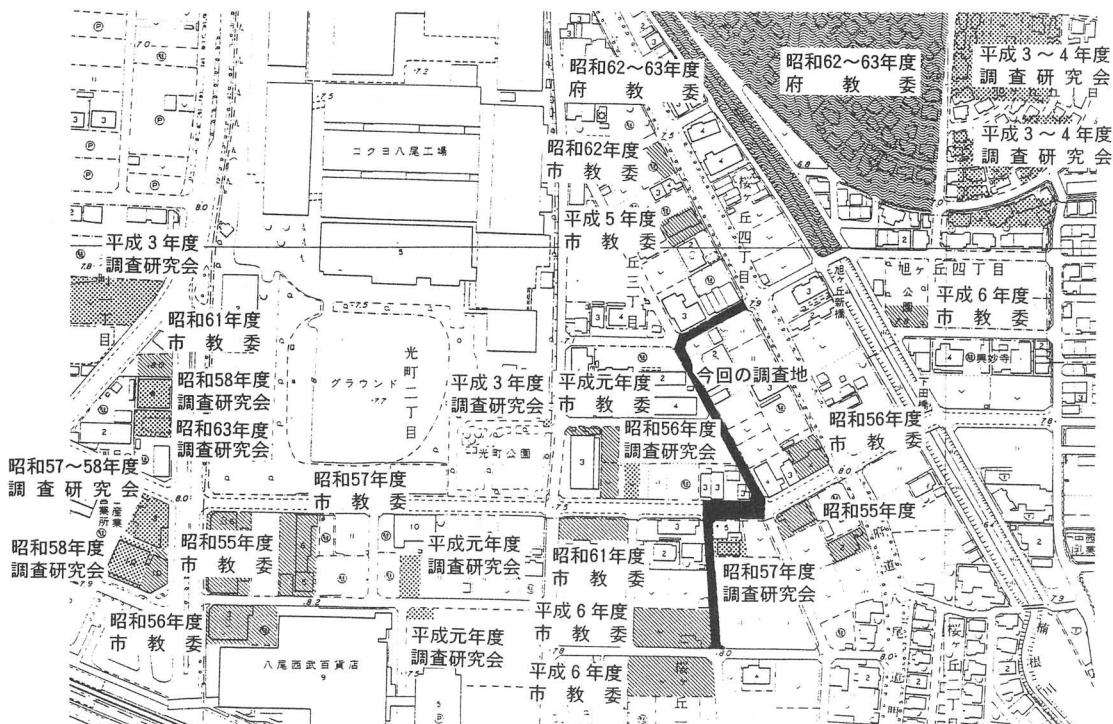
(吉田)

3. 東郷遺跡（94-369）の調査

1. 調査地 桜ヶ丘1～3丁目
2. 調査期間 平成6年9月22・28日・10月3・4日
3. 調査方法 水道管路埋設予定箇所に1.3×4mの調査坑を12箇所設定した。各調査区においては、機械と手作業による掘削及び精査を行って、遺構及び遺物包含層の存在状況を確認し、遺物の収拾を実施した。その後掘削断面を精査し写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 各調査区にあっては、既設管と下水道の掘削によりかなり攪乱をうけているため、平面的な調査が殆ど不可能であったが、各調査区の概要をかいつまんで記すことにする。

第1調査区及び第2調査区においては、盛土・旧耕土以下は砂の層が厚く堆積するのみで遺構や顯著な遺物包含層はなかった。

第3調査区において、初期須恵器や土師器を多量に包含する暗茶褐色の粘質土を確認した。この包含層の下面、青灰色シルト層の上で馬の歯を伴う



第11図 調査地周辺図 (1/5000)

顎骨が出土した。この直上にはTK208型式の壺蓋が完形で出土し、横の断面には無蓋高壺の壺部片が出土した。これらの須恵器は馬の顎骨に伴う可能性が強く、何らかの祭祀の痕跡と考えられる。

また第5調査区においては、包含層の灰褐色砂質土層のベースになる灰褐色シルトより掘り込まれた暗灰色粘土の落ち込みを検出し、断面の落ち込みの底に当たる部分よりMT15型式の須恵器の壺部蓋身が出土した。

第6調査区においては、4～5箇所の土師器を伴う小穴と思われる遺構を断面で確認した。

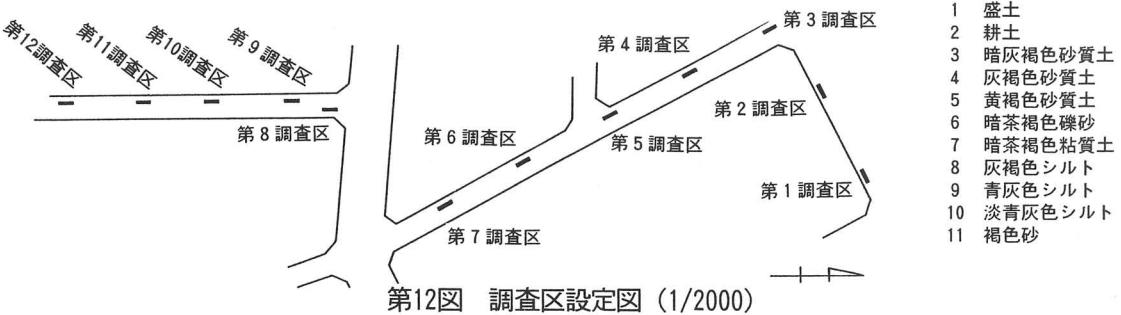
第7調査区においては、包含層の茶褐色粘質土内において庄内河内型甕が半完形で埋没しているのを検出し、その下に土壙または溝状の落ち込みがあるのを確認したが、調査区内において、その遺構の性格を明確にすることはできなかった。

他の調査区においても同様の包含層の拡がりが認められ、第11調査区で須恵器片、第12調査区で土師器高壺片等若干の遺物の出土をみたが、他の埋設管路による攪乱のため、顕著な状況で遺構の存在を確認し得なかった。

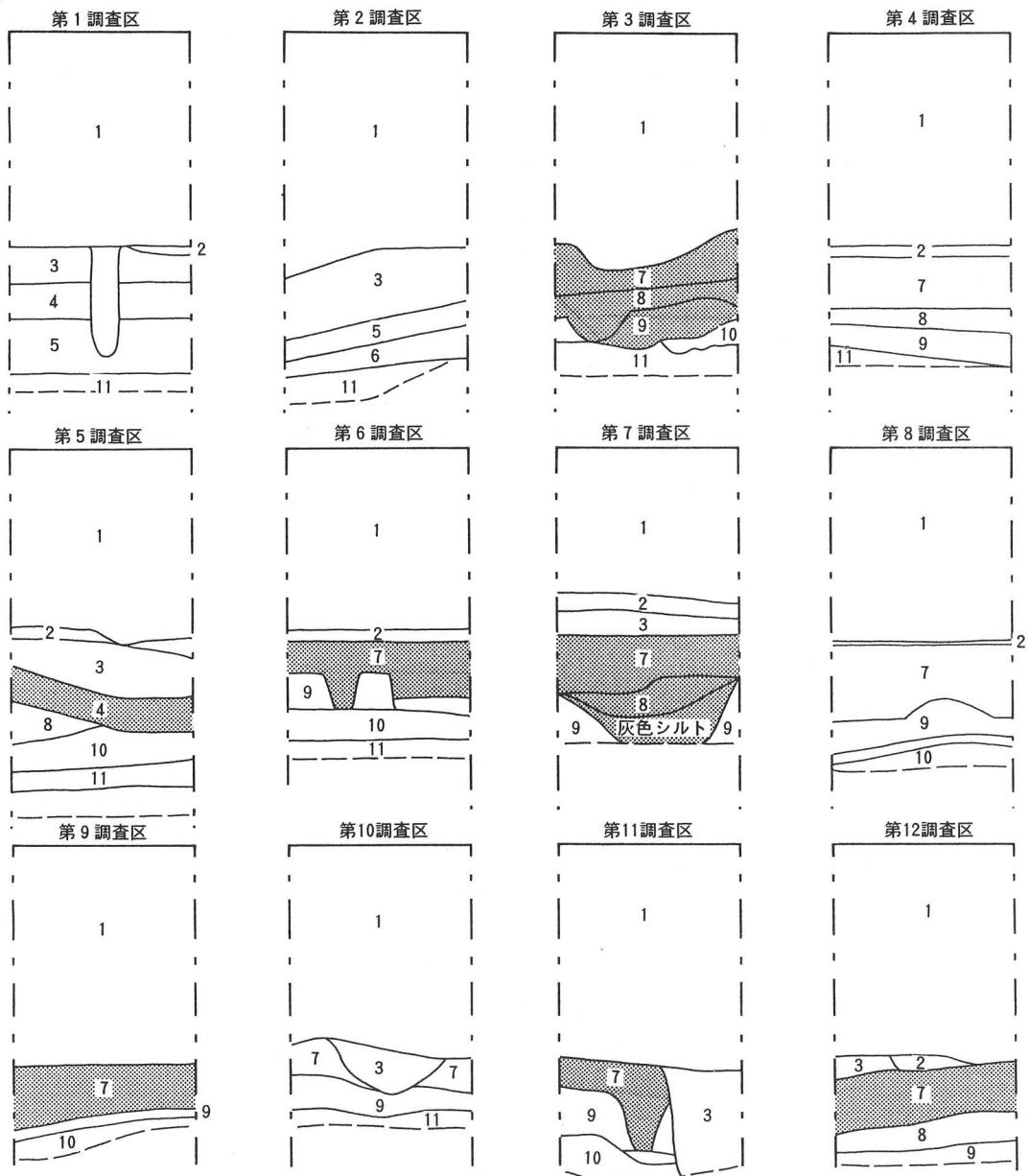
5. 調査結果

今回の調査では、管路埋設に伴う調査であったため、掘り幅も狭く、既設埋設物による攪乱が多かったが、幾つかの重要な成果を得ることができた。今回確認した古墳時代前期～中期を中心とする包含層及び遺構は、東郷遺跡の最も典型的な遺構のあり方を示すものである。

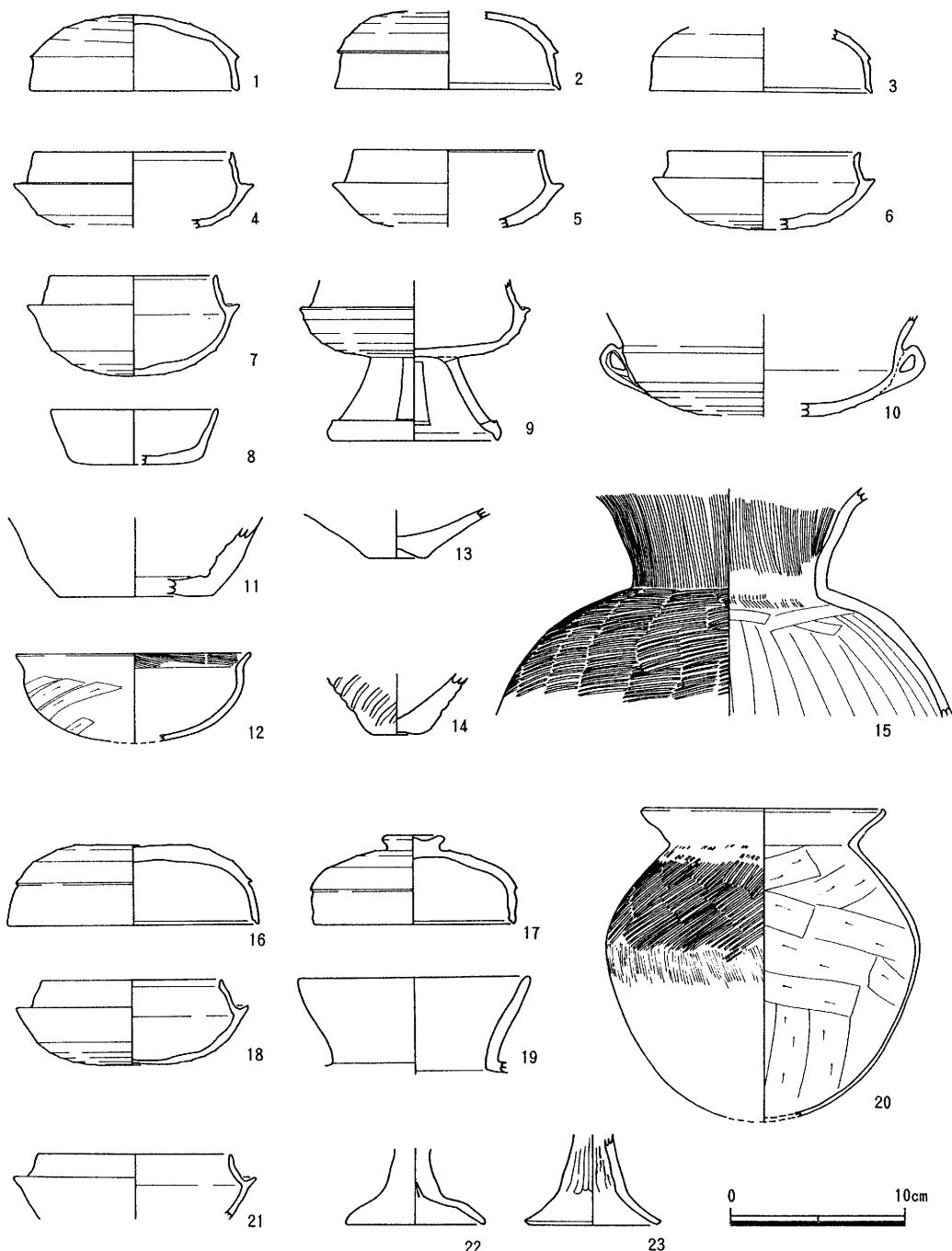
第3・5・6・7調査区で検出した落ち込み・土壙・小穴群等の遺構群は管路延長が南北に及んでいたために、当遺跡北半の遺構や包含層の分布範囲や存在状況を知る上で貴重なデータとなった。特に第3調査区において、馬の歯を伴う顎骨がTK208型式の須恵器とともに出土していることは古代の祭祀形態を考えるうえでも興味深い資料となるものと考えられる。今後付近で行われるであろう調査の成果を待ちたい。(米田)



第12図 調査区設定図 (1/2000)



第13図 土層断面図 (1/40)



第14図 出土遺物実測図 (1/4)

1～15 第3調査区、16～19 第5調査区

20 第7調査区、21 第11調査区、22・23 第12調査区

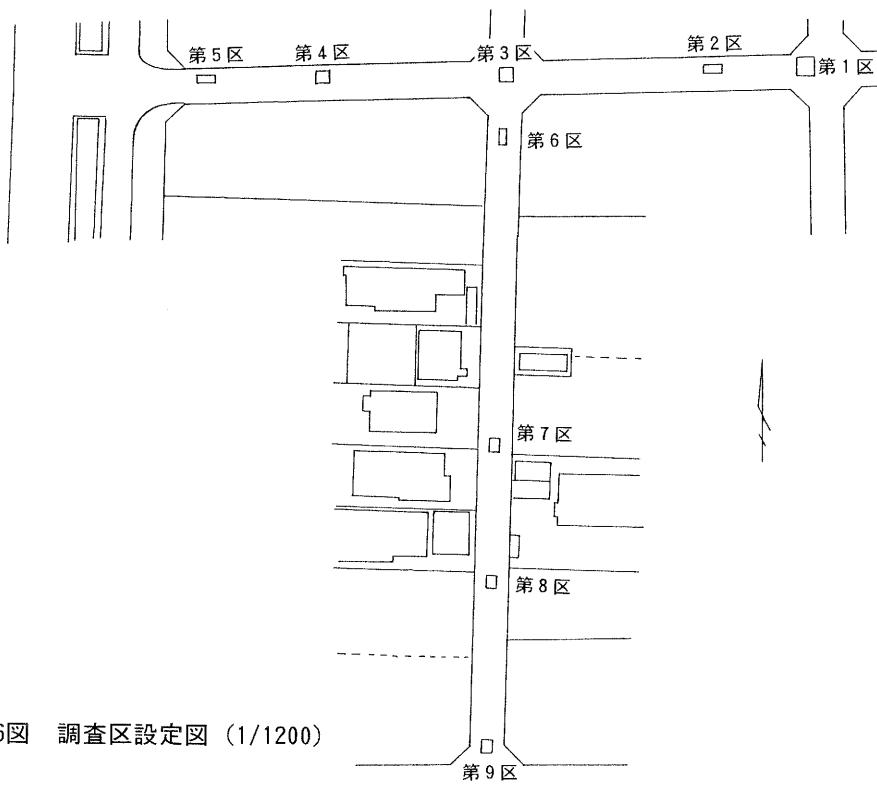
4. 中田遺跡（94-312）の調査

1. 調査地 八尾木北6丁目地内
2. 調査期間 平成6年9月20.28.30. 10月30日
3. 調査方法 下水道工事における人孔部分（2m×2m）を6カ所、管路埋設部分には約3m×1.1mの調査区を3カ所を設け、それぞれを機械と人力を併用して地表下2m～2.5mまで掘削、調査した。なお東西道路を東から第1区から第5区とし、南北道路を北から6区～9区とした。
4. 調査概要
- 〔第1区〕 今回の調査では最も多くの遺物が出土している。地表下1.15mの6層（層厚0.2～0.25m）には6世紀前半の須恵器、土師器を多く含んでいる。この土層は上面から0.1～0.15mで土器が押し潰れた状態で軟質の韓式系の長胴甕が土しており、また完形の杯蓋もみられることから生活面が遺存していることが考えられる。そしてこの下部層の上面ではピットが検出できた。

〔第2区〕 第1区より11m西に設けた調査区で、やはり地表下1.1mの



第15図 調査地周辺図 (1/5000)

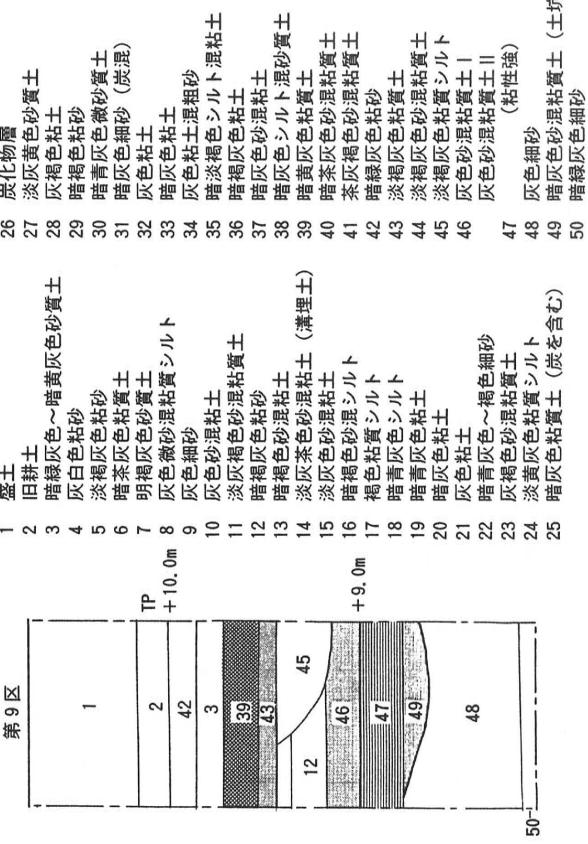
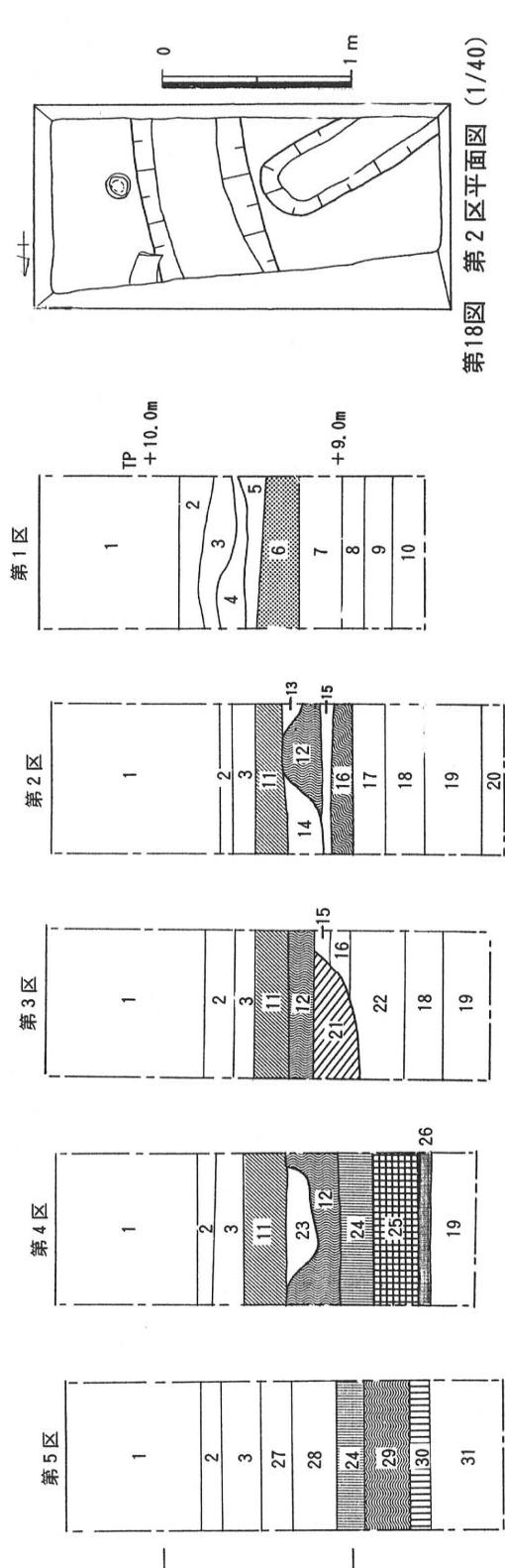


第16図 調査区設定図 (1/1200)

11層より多くの須恵器、土師器が出土する。そして地表下1.25mの12層上面では溝状遺構2条を検出したが、とくに南北方向の溝（幅0.3m、深さ0.19m、埋土－淡灰茶色砂混粘土）の東肩には藁状の物を燃やし、その上に須恵器杯身を裏返しにして覆っていた。杯身中にも炭の混じった土とともに土師器の破片がはいっていた。このような状況から水辺の祭祀が想定されよう。その時期は、杯身がTK23～47に比定でき6世紀初頭と推定される。また地表下1.5mの16層上面は第2遺構面となり、ピットが検出できた。そしてこの遺構構築層は庄内期～布留期の遺物包含層でもある。

〔第3区〕 地表下1.1mの11層とその下部12層で須恵器・土師器などが出土している。また地表下1.4mの15層上面では東西方向の溝状遺構の一方の肩を検出する。埋土は灰色粘質土で植物遺体を含んでおり、弥生土器片、土師器片、須恵器などが出土している。

〔第4区〕 地表下1mの11層には庄内～古墳中期の遺物を含んでおり、下部の12層上面では南北方向の溝（幅0.67m、深さ0.18m、埋土－灰褐色砂混粘質土）を検出した。埋土より須恵器杯や土師器片が出土している。この



遺構構築層以下では須恵器は含まれない。特に地表下2mの19層上面には5cm前後の炭化物層があり、弥生後期～庄内期の遺物片がみられることから集落の存在が推定される。

〔第5区〕 24層より遺物片は確認できるが、顕著にみられるのは29層以下0.5mの堆積層で、庄内期～布留期の遺物が出土している。

〔第6区〕 地表下1.05mの11層およびその下部12層で土師器片、須恵器片が若干出土したが、第4区でみられた炭化物層は確認できず地表下1.95mには炭化物を含む細砂層が広がっていた。

〔第7区〕 地表下1.05m11層以下0.6mまで遺物が包蔵されている。遺物はいずれも碎片であるが、庄内～布留期のものである。地表下1.65mの35層には上面に粘土混粗砂が堆積しており、耕作面となる可能性がある。また地表下1.85mの36層には僅かではあるがサヌカイト片、土器片が含まれていた。

〔第8区〕 地表下1mの39層では若干の土師器片がみられ、下部の40層上面では東西方向の溝（幅1.2m、深さ0.25m、埋土－暗灰褐色砂混粘質土）を検出した。遺物は出土せず、時期は不明。なおこの遺構構築層とその下部で土師器片が多く出土している。

〔第9区〕 地表下1mの39層とその下部42層で土師器片が出土しており、43層上面では淡褐灰色粘質シルトを埋土とする東西方向の溝状の落ち込みがみられた。また地表下1.55mの45層とその下部46層で土師器片が出土しており、47層上面では深さ0.14m、暗灰色砂混粘質土を埋土とする土坑を検出した。埋土中には弥生後期の甕、庄内甕片がみられた。

5. 出土遺物

上述のように各調査区から遺物が出土しており、その時期は弥生後期から古墳中期に及ぶが碎片が多く図化できたものは以下の16点に留まった。特に遺構の検出できた第1・2区の5～6世紀代のものが多くを占める。

(1～10) は第1調査区の6層から出土したものである。(1)は土師質の韓式系の長胴甕で、口径22.4cm、残存高31.5cmを測る。長胴の体部から口縁は外上方に伸び端部には凹面をつくる。外面は胴部～頸部にかけて横位のタタキを施し、頸部には斜め方向のタタキを行った後にナデ消している。タタキは細かく密に施している。内面には体部から頸部にかけて横位のタタキを行った後に縦位のタタキを施している。(2)はタコ壺で、口径は4.4cm、残存高は9cmを測る。1孔を穿っているがちょうど孔を塞ぐように小石を詰めてい

る。(3～10)は須恵器である。甌(3)は口径12.6cm、口縁端部には内傾する凹面をもつ。(4)は壺口縁部、口径9.3cm。杯蓋(5～～8)はいずれも口径15～16cmで、口縁は下外方に下り、端部は内傾する凹面と成す。稜は退化しており鈍い。杯身(9)は口径約13cm、たちあがりは内傾してのびた後直立し、端部には浅い凹線がみられる。(10)のたちあがりは内傾してのび端部は丸い。これらの特徴から蓋杯はMT15～TK10の範疇に比定できよう。

(11～15)が第2区から出土したものである。土師器甌(11)は外面体部下半部は斜め方向、上半部は上方向、そして口縁部は横方向のハケメを施す。内面はナデを行う。口径12cm程の小型の甌だが内面には漆が付着しており、口縁部外面にも漆がたれている様子がみられる。(12)は甌口縁部で、短く水平にひらき1乗の凸線を巡らし屈曲し上外方にのびる。以上2点は11層より出土したものである。(13)は第1遺構面の溝出土の杯蓋で口径12cm、稜線にはまだ鋭さが残っており、口縁部は垂直に下った後外反し端部は凹面を成す。(14)水辺の祭祀に使用されたと推定される杯身で口径9.8cmと小型で、立ち上がりはやや内傾気味に直立し、端部には1条の凹線がめぐる。これらの須恵器はいずれもTK23～47の時期に比定できる。土師器質の甌(15)は(14)の杯身の近辺で見つかったものだが祭祀との関連は不明である。口径18.4cm、球形の体部から鋭く屈曲し、口縁端部は平面を成す。体部外面には横あるいは斜め方向のハケメを施し、内面は体部から頸部にかけては縦方向のハケメを施し、底部付近はヘラケズリを行う。

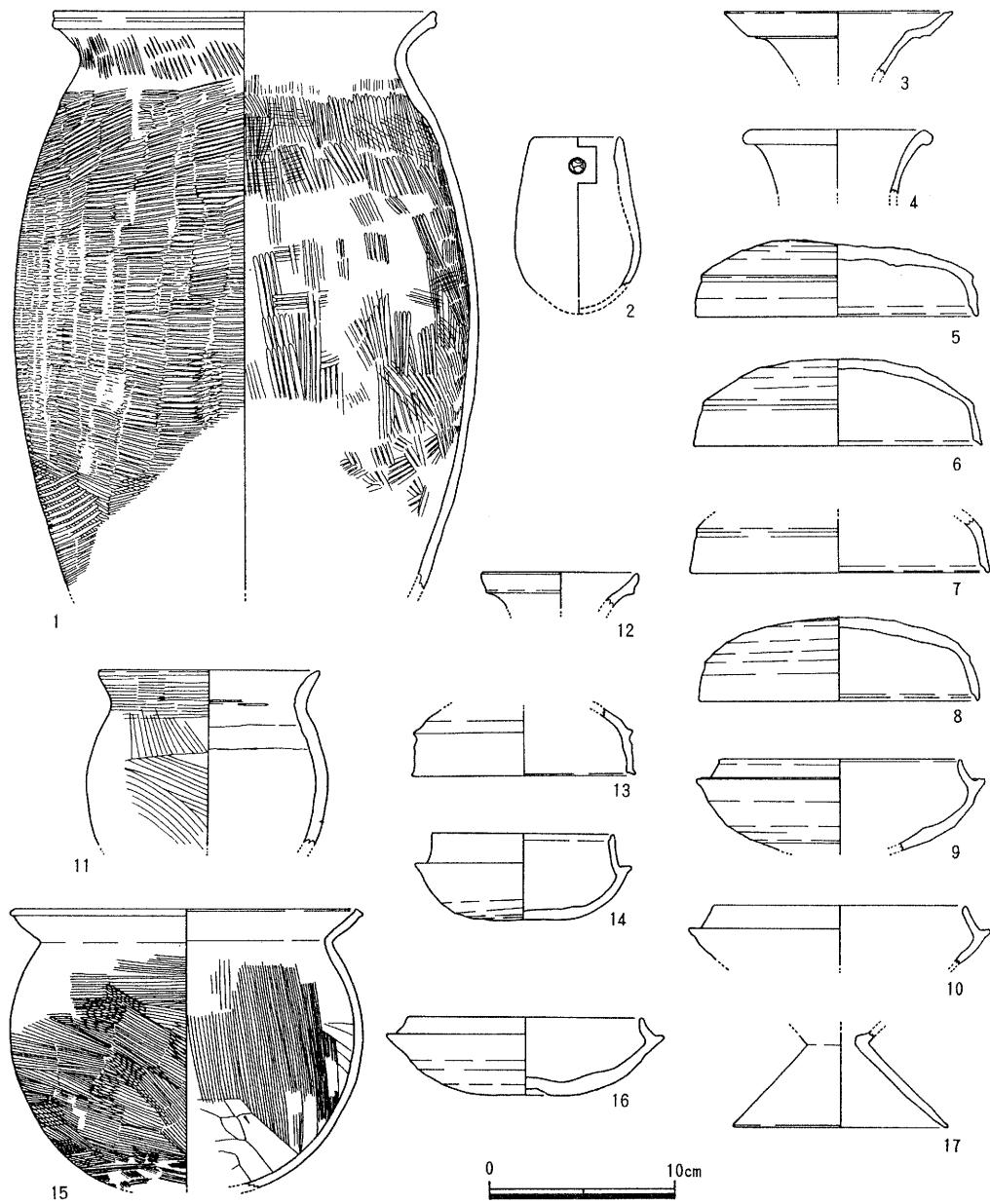
これら以外に(16)は第4区12層出土の杯身で口径12.5cm、立ち上がり短く内傾し端部はまるい。底面にはヘラ切り痕が残る。TK10。

また(17)は第9区43層出土の布留期の中空器台である。

6. 備 考

今回の調査では古墳時代中期以降の遺物と弥生末～布留期の遺物が出土し特に東端の第1・2区では6世紀代の水辺の祭祀とみられる状況や韓式土器がみられたように古墳時代中期以降の遺構面が検出できた。平成5年には第1区の東がわの南北道路の調査が行われたが、今回検出された古墳時代中期遺構は検出されておらず、庄内～布留期を中心であった。また西側の楠根川周辺では庄内～布留期の遺構や5世紀中頃の古墳が見つかっている。このようなことから調査地周辺では弥生後期から古墳時代にかけて連綿と集落が営まれていたことが確実となった。

(道)



第19図 出土遺物実測図 (1/4)

5. 中田遺跡（94-311）の調査

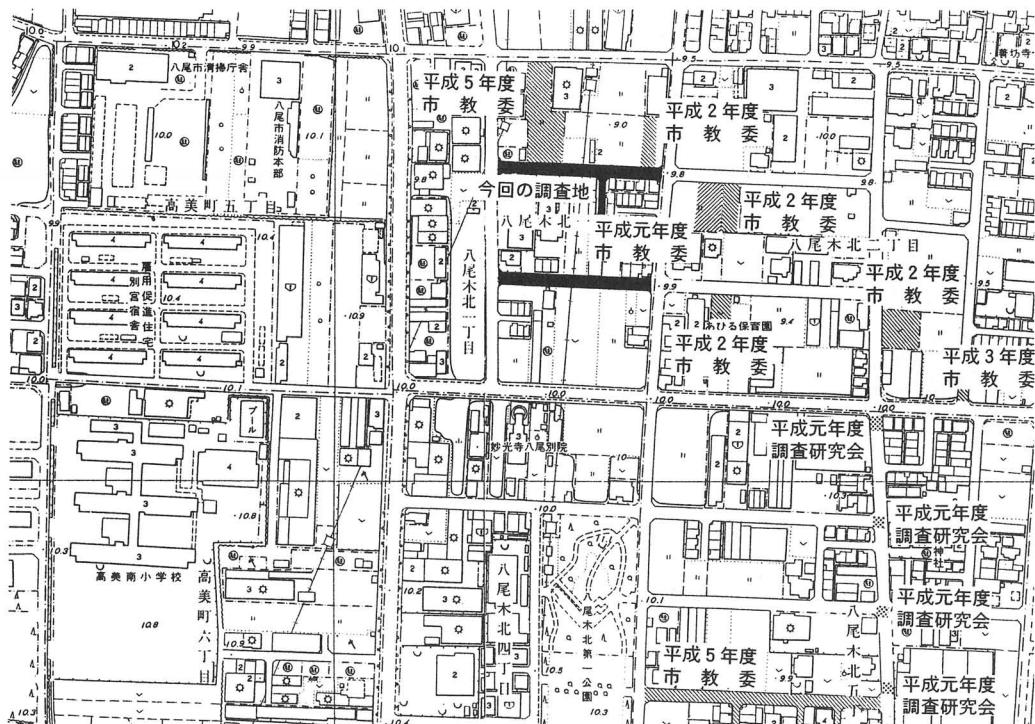
1. 調査地 八尾木北1丁地内

2. 調査期間 平成6年9月26日、27日

3. 調査方法 人孔部4ヶ所について、重機と人力を併用して掘削を行なった。

4. 基本層序 第1調査区では、地表下1.85mまで掘削を行なったところ、地表下1.7m～1.8mで古墳時代前期の土器片を含む黒灰色粘土層を確認した。また、その東側の第2調査区では、地表下2.4m前後まで掘削を行なったところ、地表下1.65m～2.15mでの土器片を密に含む褐灰色粘砂層、灰色シルト質粘砂層、灰色粘砂層を確認した。土器片が密にはいることから、遺構などの埋土である可能性もある。第1・第2調査区の約70m南の第3・第4調査区では、地表下1.9m前後まで掘削を行なったが、包含層等は検出できなかった。第3調査区では地表下1.5m以下で、第4調査区では地表下1.9m以下で砂層を確認している。(吉田)

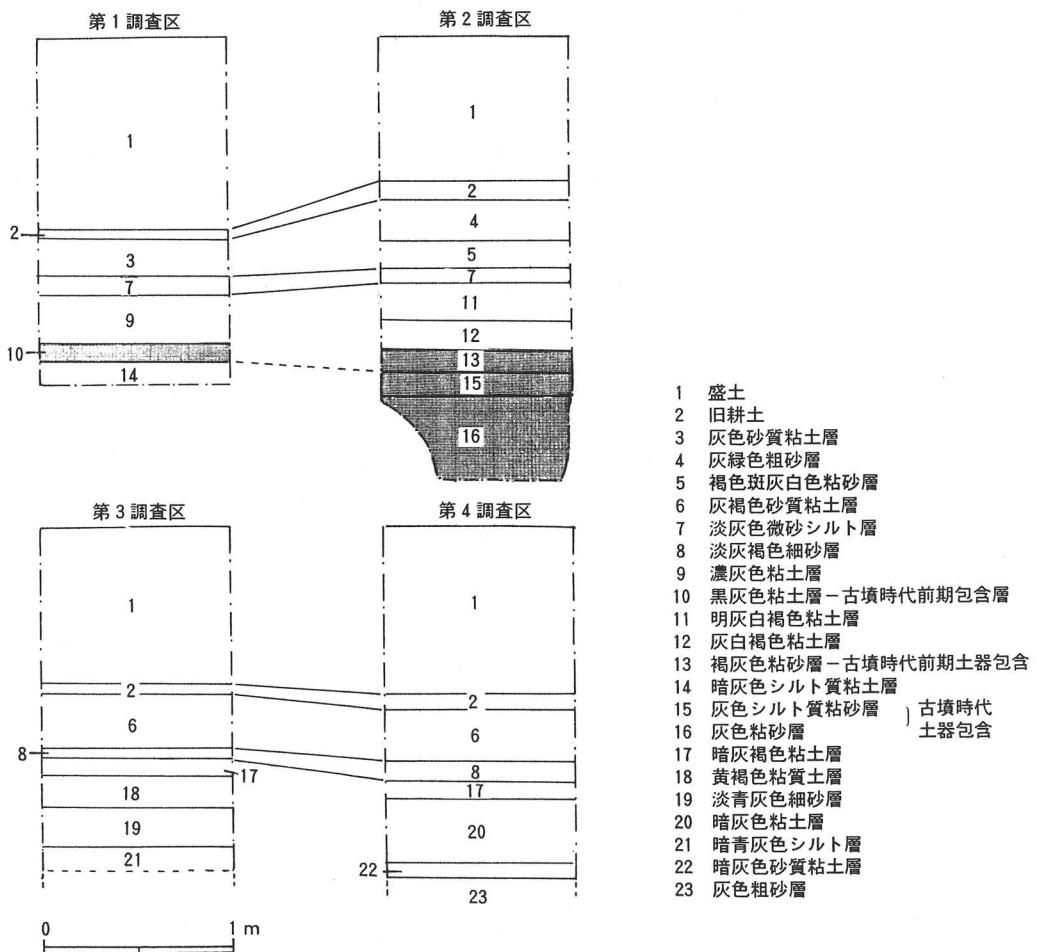
(吉田)



第20図 調査地周辺図 (1/5000)



第21図 調査区設定図



第22図 土層断面柱状図 (1/40)

6. 東弓削遺跡（93-298）の調査

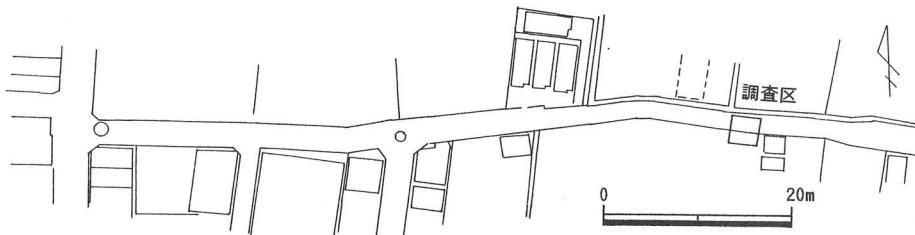
1. 調査地 八尾木東2・3丁目地内
2. 調査期間 平成6年1月16・17日
3. 調査方法 下水道推進発進立孔（6.15m×5.75m）掘削工事に伴う調査で、主に遺物の包蔵状況を確認した。そのため重機掘削を中心に行い、遺物包含層においては人力による掘削も併用した。
4. 調査概要 調査開始時点には既に地表下1m付近まで掘削が終了していた。しかし、遺物を包蔵している土層を少なくとも4層確認した。

地表下1.3mの3層暗青灰色粘質土上面では中世の溝状遺構がみられ、また、この層中（層厚0.2m）には土師器、須恵器を包蔵している。

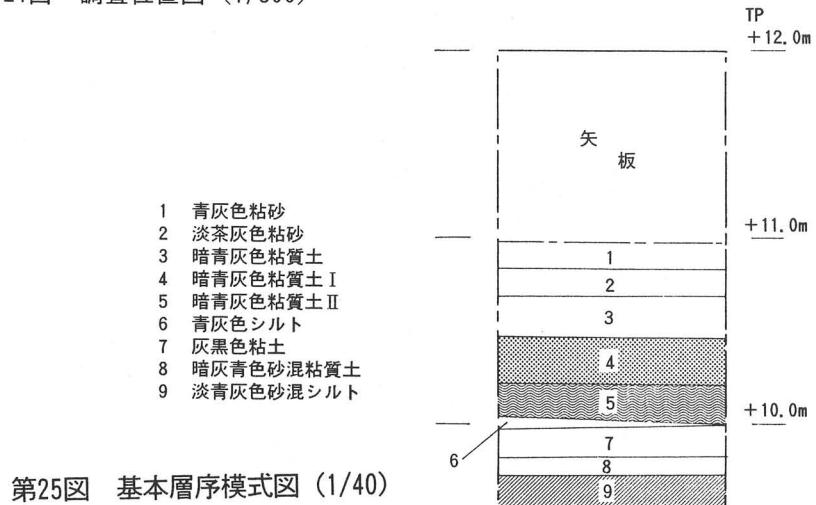
最も多くの遺物が出土したのは地表下1.75mの4層暗灰色粘質土I（層厚0.25m）とその下部の暗灰色粘質土II〔やや粘性が強い〕（層厚0.18～0.25m）である。この2層からは弥生時代中期後半から鎌倉時代初頭にかけての遺物が出土している。特に6世紀から7世紀にかけての遺物の出土が顕著で



第23図 調査区周辺図 (1/5000)



第24回 調査位置図 (1/800)



第25図 基本層序模式図 (1/40)

ある。しかし、調査区東側ではこれらの土層はみられずに灰色砂質土の堆積が確認でき、暗灰色砂混粘質土Ⅰ・Ⅱ層が遺構である可能性が強い。

そして、地表下2.25mの9層暗淡緑灰色シルト上面では約2m以上、深さ0.3mの土坑、あるいは溝と思われる切り込みが断面で確認できた。埋土は暗青灰色シルト粘砂で、時期は明確でないが古墳時代中期以降とみられる。

さらに9層中には弥生土器が完形で5個体出土している。いずれも中期後半に位置付けられるものである。出土土器は壺3、水差し型土器1、無頸壺1、蓋1で蓋以外はすべて焼成後に底部に穿孔が施されていた。

5. 出土遺物

〔淡緑灰色砂混シルト〕(1～6)の弥生土器が出土している。前述のようにいずれも底部に焼成後に穿孔が成されている。

(1・2)は中位以下に最大径をもつ下膨れの河内地方特有の広口壺である。(1)は器高34.6cm、口径19.6cm。外面は口縁から体部にかけて櫛描簾状文を、体部下半部には横方向のヘラミガキを密に施す。簾状文施文原体幅は約3.8cmで、ピッチは短く2～4mm間隔である。内面はイタナデで、底部にはハケメが施されているがイタナデによって切られている。(2)は器高38.6cm、口径

21.8cm。外面は頸部から体部にかけて縦方向のヘラミガキ、体部下半部は横方向のヘラミガキを施す。口縁には2条の波状文がみられる。内面は口縁から体部にかけて横方向のヘラミガキを、体部下半部はイタナデ、底部はハケメの後にイタナデを行う。

(3)は瀬戸内地方の影響が伺える広口短頸壺で、器高29.7cm、口径15.1cmを測る。外面は体部上半部はハケメ、底部は細めのハケメの後にヘラミガキを体部下半部に施し、内面はナデを行う。

(4)は無頸壺は器高15.6cm、口径14.1cmで口縁部下に2個一对の孔が対面に穿たれており、蓋(5)をもつ。外面は口縁部に刻み目をいれ、体部上半部に櫛描簾状文（施文原体幅約2.9cm）、下半部はヘラミガキを施す。内面は底部にハケメをナデ消しており、中位は横方向に、上位は斜方向にハケメを行う。蓋(5)は外面はヘラミガキ、内面は横方向のイタナデを行う。

(6)は水差し型土器で器高22.8cm、外面は口縁から頸部にかけて6条の列点文を施し、以下体部は櫛描簾状文（施文原体幅約3.15cm）、底部と簾状文間はヘラミガキを行っている。内面は底部は縦方向に、体部は斜方向に密に、そして口縁から頸部にかけて横～斜方向にハケメを施す。

(7)は(1～6)とは離れたところから出土した台付鉢の脚部で、9個の穿孔をもつ。2条の刻み目と刺突文がみられ、ヘラミガキを施す。

(8)は瀬戸内地方から搬入された甕で器高29cm、口径14.4cmを計る。上下に肥厚した口縁と頸部には刻み目が施され、底部から体部にかけてヘラケズリを行い上半部はイタナデを施す。内面はイタナデで、頸部付近はハケメになっている。

前述のように遺物の大半は暗灰色砂混粘質土Ⅰ・Ⅱから出土し、その時期は磨滅した弥生IV様式の壺口縁部を除くと6世紀中葉から14世紀にまで及ぶ。そして土器以外では5世紀後半の埴輪片が出土している。

(9)は土師器の鉢は内面に放射線状の暗文がみられ、内外面は横方向の細かいヘラミガキを行う。(10)は土師器の杯で口径15.6cmを測る。いずれも口縁部に焼成痕がみられる。(11.12)は甕口縁部。(11)は外面体部から口縁部にかけてヘラミガキ、内面は板ナデ。高杯(13～17)は脚柱部が身入りで筒状で、杯接合部分が明瞭な段を成すもの(13,14)と脚柱部が中空でゆるやかに下り杯接合部分に稜がみられるもの(15～17)の2型式がある。杯部(14,15,16)にはいずれも放射線状暗文が施されている。

(18～20) は須恵器甕。(19)は外面にタタキ成形の後カキメを施す。(20)は口径9.8 cm、器高31.7cm、外面は格子状タタキをハケで消している。提瓶(21)の口頸部は上外方にのび、端部は丸い。把手は形骸化しておりボタン状の把手が付いている。杯蓋(22)は天井部は丸みを持つもので、稜線は浅い凹線が巡る。杯身(23～25) はたちあがりが内傾し、低い。(26)は高杯脚部。

これらの土師器、須恵器は6世紀中葉から7世紀前半の時期に比定できると考える。この時期以降奈良時代までは遺物が確認できず、8世紀後半からの遺物が出土している。

土師器杯(27)は口径16.6cm、器高5.2 cm。外面調整はC手法を用いる。土師器甕(28.29) は体部から短く外上方にのびる口縁をもつものと丸い体部から上外方に外湾しながらのびるものがある。須恵器杯(30.31) は蓋杯はボタン状のつまみの付くもので、杯身は高台が外寄りに付けられている。須恵器甕(32.33) は直立する口縁をもち自然釉をもつ(33)がある。須恵器壺(34～36) は無頸壺と壺Lの2種が出土する。他に鉢(37)がみられる。

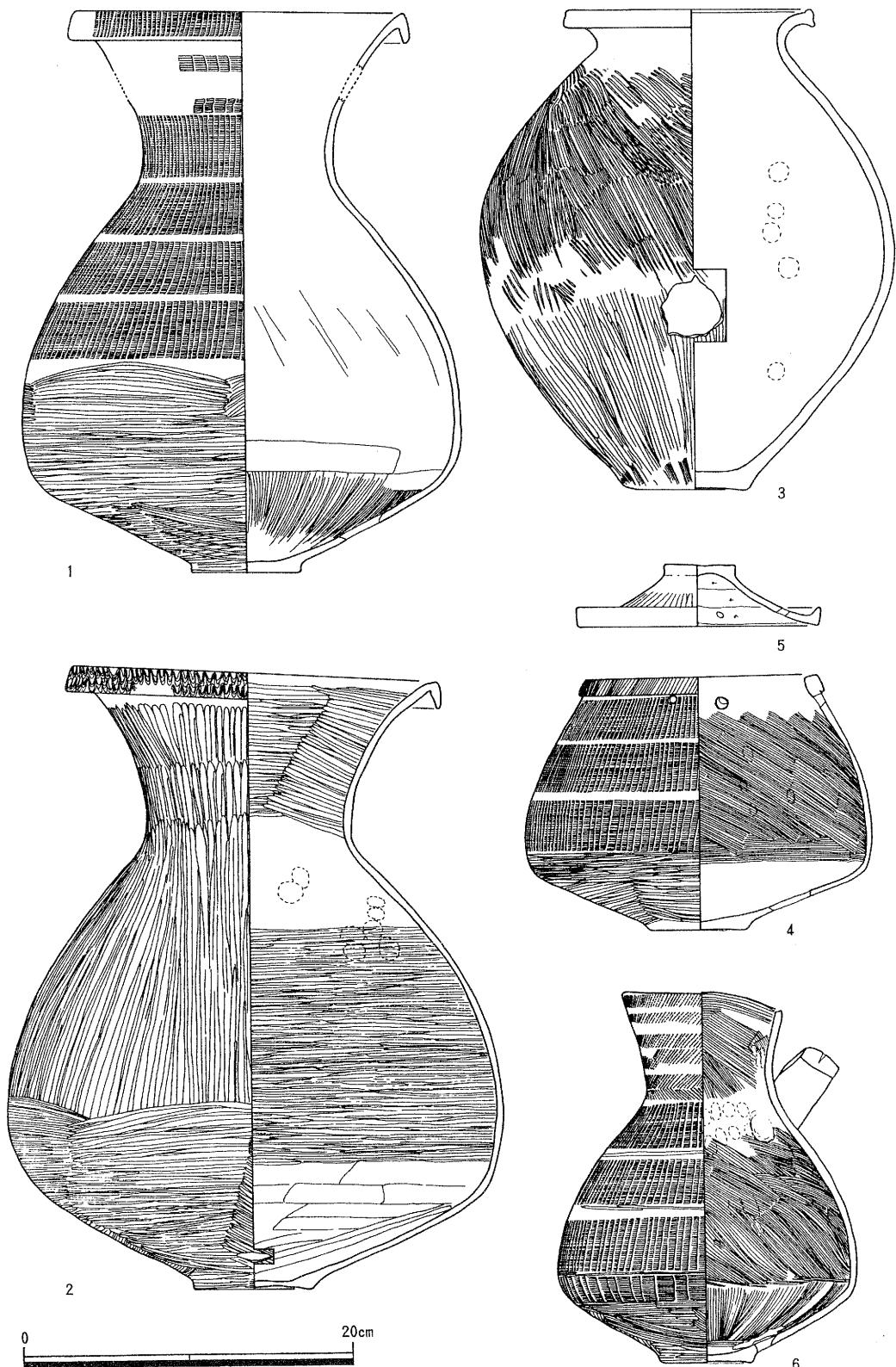
(38～44) の土師皿は灰白色を呈し、白色系土器といわれるものである。口径8.8～17.6cm、器高1.9～3.4 cm以上を測る。また椀型土器の高台部分(45)などが出土している。これらの遺物は時期は明確にはできないが、この遺物包含層中には瓦器が含まれていないところから14世紀以降としておきたい。

以上の土器以外に平瓦(46.47) と埴輪(48～53) が出土している。平瓦はいつも凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目がみられるもので側面はヘラで整えている。一枚作りとみられる。

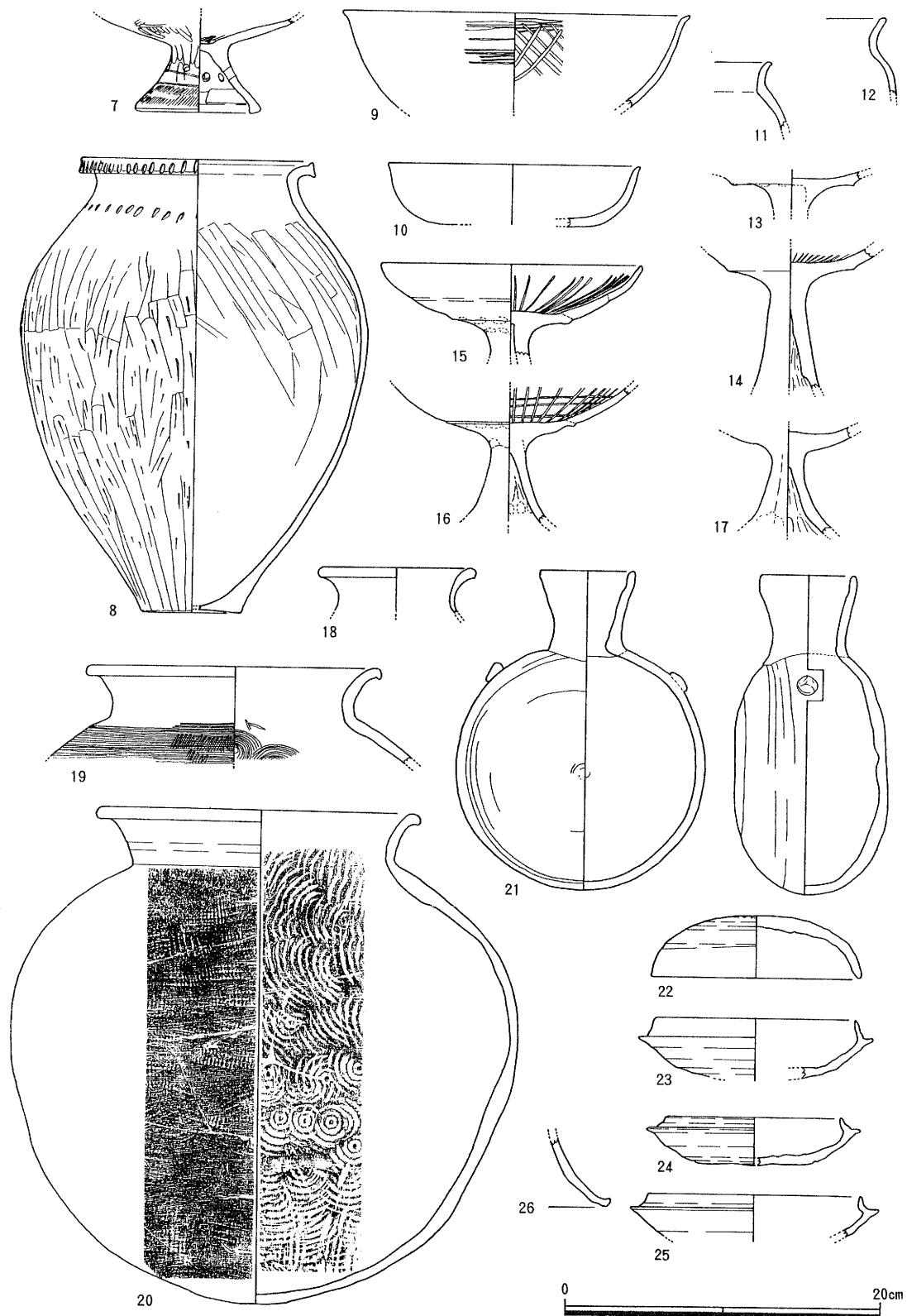
埴輪は円筒形埴輪(48～51)、朝顔形埴輪(51)、形象埴輪(53)の3種類がある。円筒埴輪は外面は1次調整にナナメハケ、2次調整にB種ヨコハケを施し、孔形は円形である。底部外面はナナメハケのみである。内面はタテハケとナデを行う。いずれも須恵質で、淡茶褐色を呈す。朝顔型埴輪は内外面ともナナメハケを施す。須恵質で、灰白色を呈す。形象埴輪は細片のため明確ではないが家形埴輪の底部と推定され、三角形と思われるスカシ孔をもつ外面をナナメハケ、内面はナデを施す。これらの埴輪は川西編年のIV期に比定できる。

6. まとめ

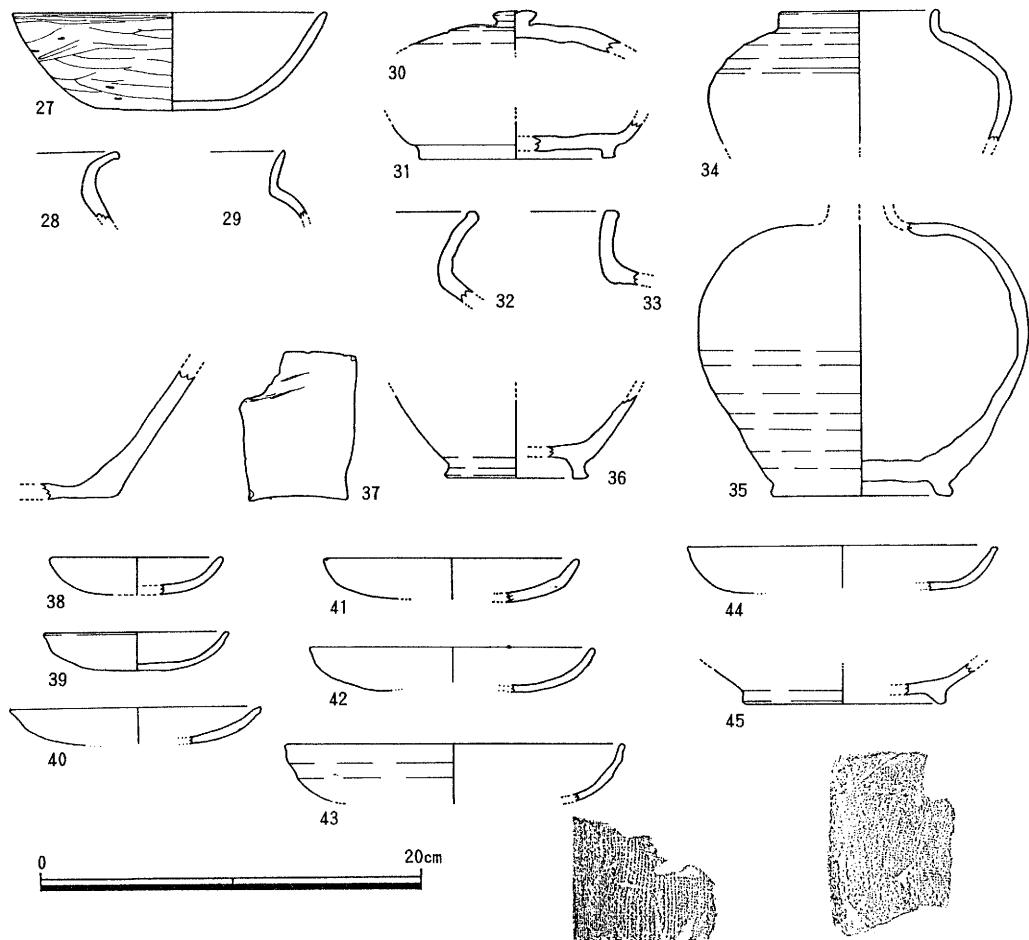
今回の調査で出土した遺物を整理すると弥生時代中期後半、古墳時代後期奈良時代末から平安時代初頭、そして鎌倉時代後半である。



第26図 出土遺物実測図 (1/4)



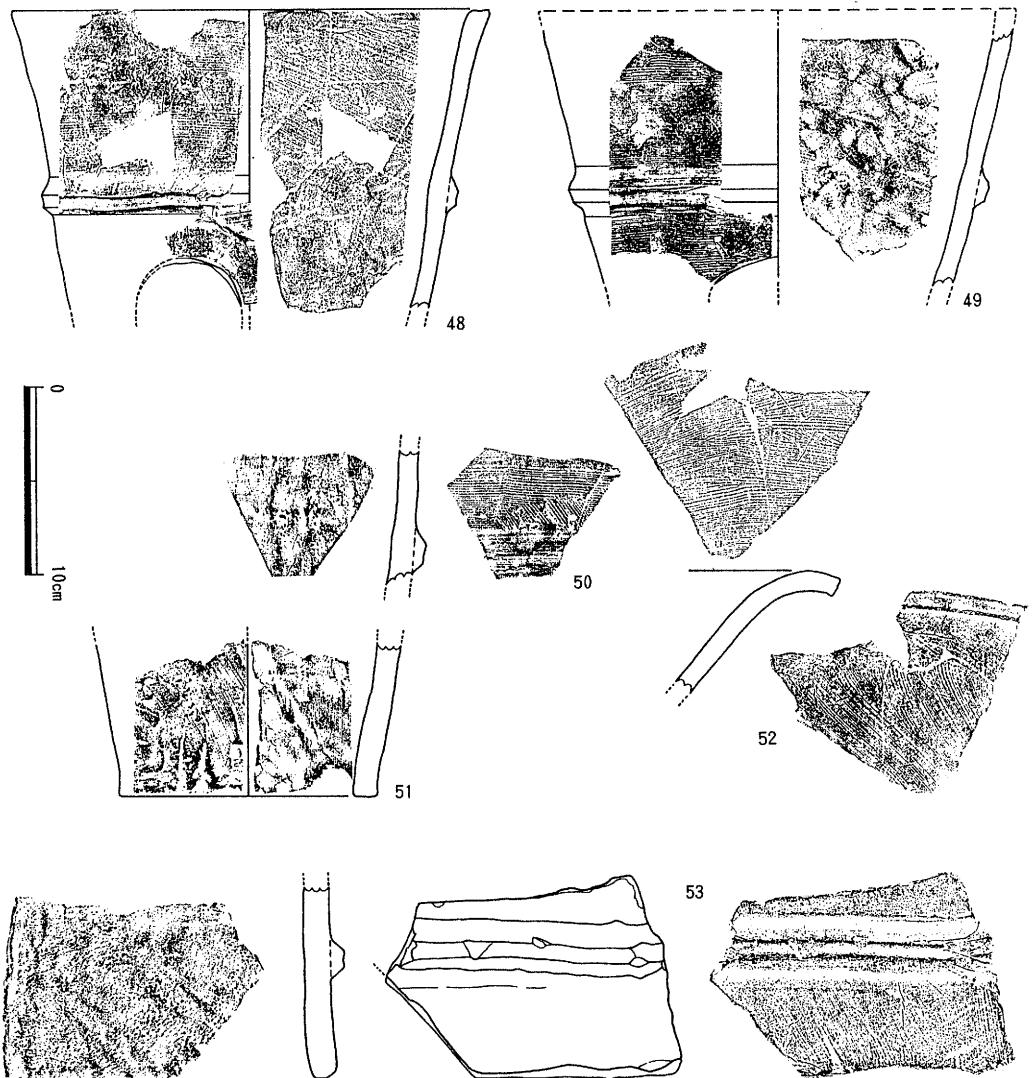
第27図 出土遺物実測図 (1/4)



第28図 出土遺物実測図 (1/4)

弥生時代中期後半の土器は河内の土器の特徴である簾状文のピッチが広く、また施文されていない土器が出現していることから、浜田氏の編年によるIV期古段階に相当する。土器はいずれも底部穿孔が施され、明らかに何らかの意図をもって放置されている。いずれの土器も生駒西麓産で、非生駒西麓は1点も含まれていない。ただやや離れた場所から瀬戸内産の甕の出土していることは注目される。昭和50年に水道管布設工事に伴い近辺の道路部分の調査を行っているが、やはり類似した層中よりIV様式の遺物が出土しており、同時期の遺構面の拡がりが推定される。

また埴輪の出土から周辺に古墳があったことは確実である。前述の昭和50年に実施された調査でも本調査地の周囲100～150 mで岩見型楯形埴輪、衣蓋形埴輪、家形埴輪、そしてV期に



第29図 出土埴輪実測図 (1/4)

相当する円筒埴輪が出土している。調査地周辺は都塚（みやこづか）と呼ばれるが、まわりにはかつて10以上の塚があり、「とつか」と呼んでいたといわれる。現在では3基ほどしかなく、いずれも人為的な手が加わり本来の形状を留めていない。しかしこの名称が示すように塚状の高まりがあったことは確かであり、今後周辺で古墳が発見される可能性極めては大きい。

さらに奈良時代末～平安時代初頭の遺物と瓦の出土は集落の存在が予想される。前述の調査でも9世紀代とみられる軒丸瓦や軒平瓦が出土しており、特に、C手法を用いた土器は精良な胎土をもっていることから、公的に近い施設があったことが想定される。また近辺には弓削寺推定地もあることからもその可能性は強い。

7. 参考文献 浜田延充「生駒西麓第III・IV様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集
大阪文化財協会1994 八尾市教育委員会『東弓削遺跡』1976

報告書抄録

ふりがな	八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書II							
書名	八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書II							
副書名	平成6年度公共事業							
卷次								
シリーズ名	八尾市文化財調査報告							
シリーズ番号	32							
編著者名	米田敏幸・道斎・吉田野乃							
編集機関	八尾市教育委員会							
所在地	〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 TEL 0729-91-3881							
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °・'・"	東經 °・'・"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
太田遺跡	大坂府 八尾市 太田	27212		34° 35' 15"	135° 35' 35"	19940728, 29	26	流域貯留浸透施設築造に伴う遺構確認調査
萱振遺跡	八尾市 旭ヶ丘	27212		34° 37' 45"	135° 36' 45"	19940811	9	防火水槽築造に伴う遺構確認調査
東郷遺跡	八尾市 桜ヶ丘	27212		34° 37' 35"	135° 36' 40"	19940922, 28, 19941003, 4	60	水道管設置に伴う遺構確認調査
中田遺跡	八尾市 八尾木北 〃	27212		34° 36' 45"	135° 37' 10"	19940920, 28, 30, 19941020 19940926, 27	24 40	公共下水道工事に伴う遺構確認調査 公共下水道工事に伴う遺構確認調査
東弓削遺跡	八尾市 八尾木東	27212		34° 36' 25"	135° 37' 10"	19940114, 17	35	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
太田遺跡	集落	平安時代	溝			黒色土器 等		
萱振遺跡	集落?	古墳時代・平安時代	溝または土壤			須恵器 土師器 綠釉陶器片		
東郷遺跡	集落	古墳時代				須恵器 土師器	馬齒出土	
中田遺跡	集落	古墳時代	溝 土壤			須恵器 土師器 韓式土器 土師器		
東弓削遺跡	集落	弥生～鎌倉時代				弥生土器 増輪 須恵器 瓦 土師器		

図 版



調査地全景



第1調査区全景



第1調査区 SD1検出状況



SD1 遺物出土状況



第3調査区 断面



第3調査区 遺物出土状況



第 5 調査区 遺物出土状況



第 7 調査区 遺物出土状況



第1調査区 韓式土器出土状況



第2調査区 遺構面（東から）

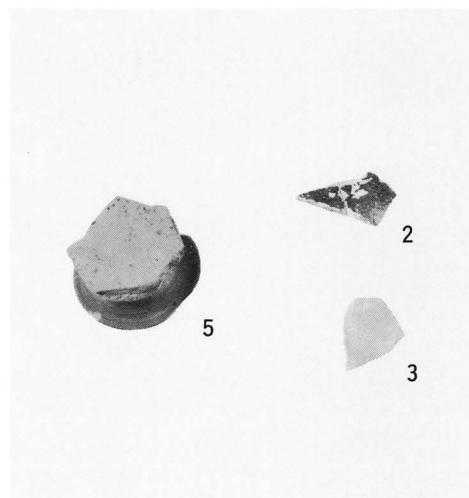
図版6 東弓削遺跡(93-298)出土状況・萱振遺跡(94-281)出土遺物



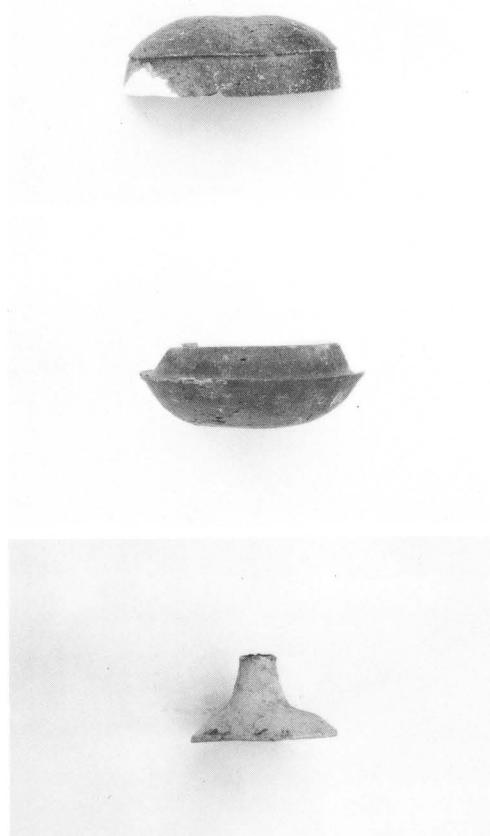
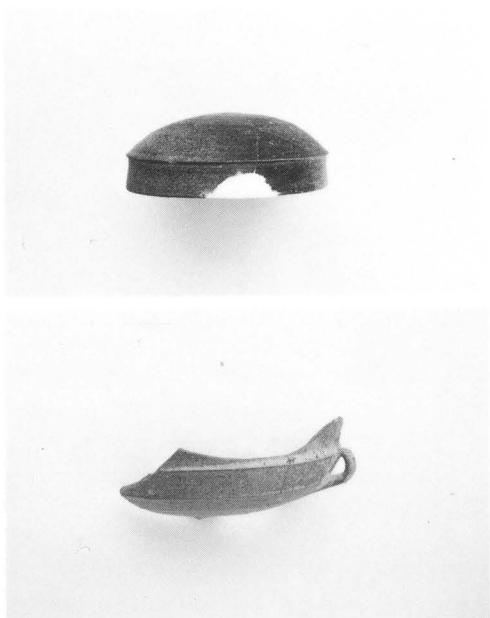
弥生土器出土状況



1

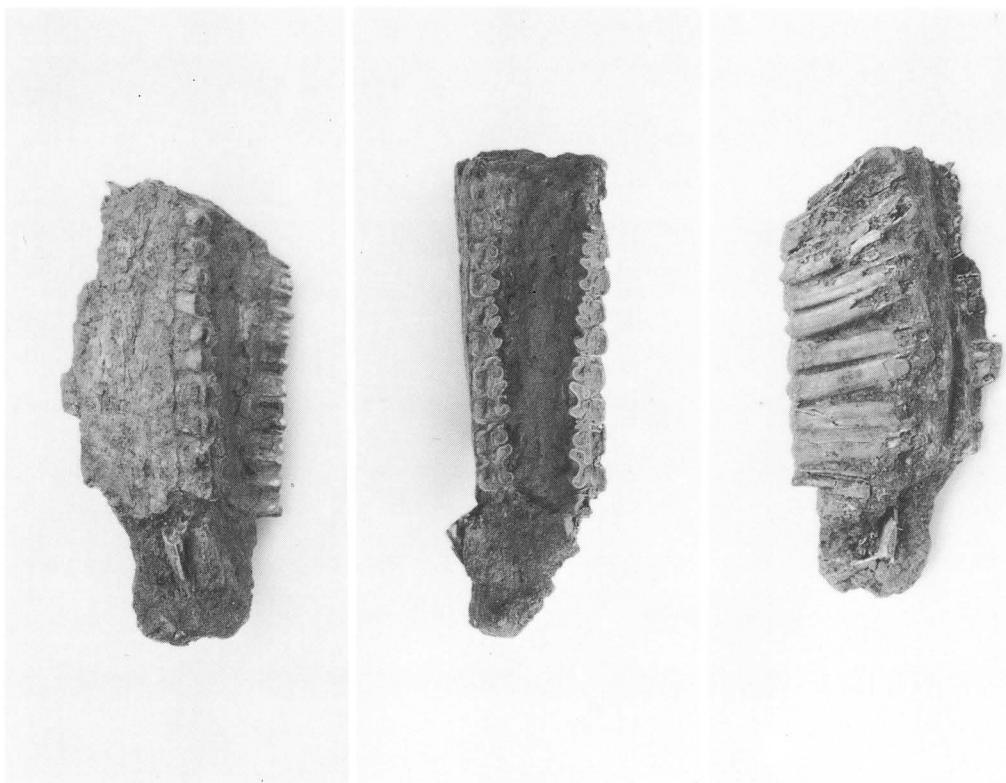


出土遺物



第3・5・7・12調査区 出土遺物

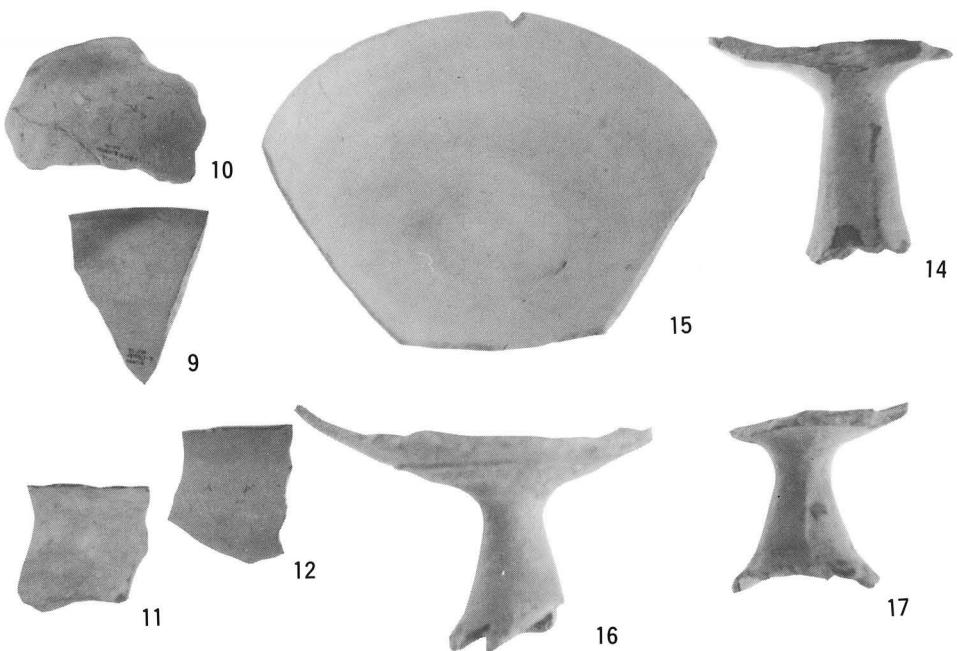
東鄉遺跡（94—369）・太田遺跡（94—149）



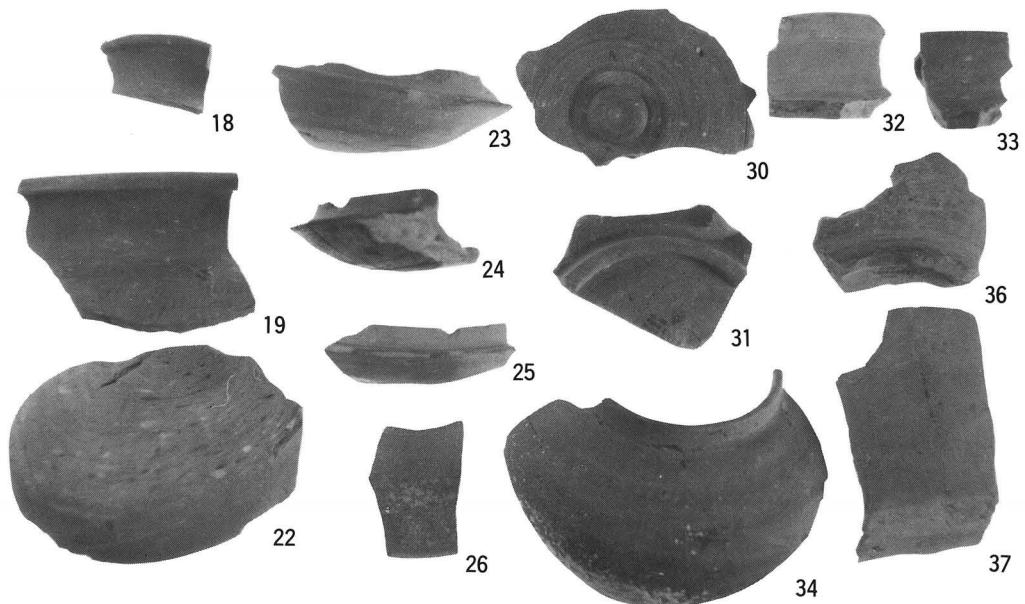
東鄉遺跡出土馬下顎骨



太田遺跡 SD-1 出土遺物

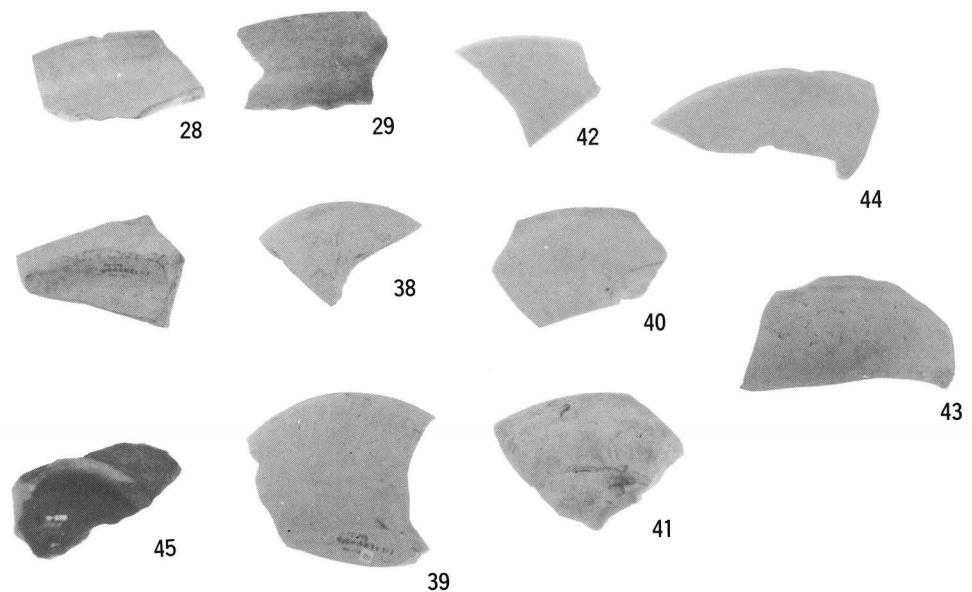


第4・5層出土土器

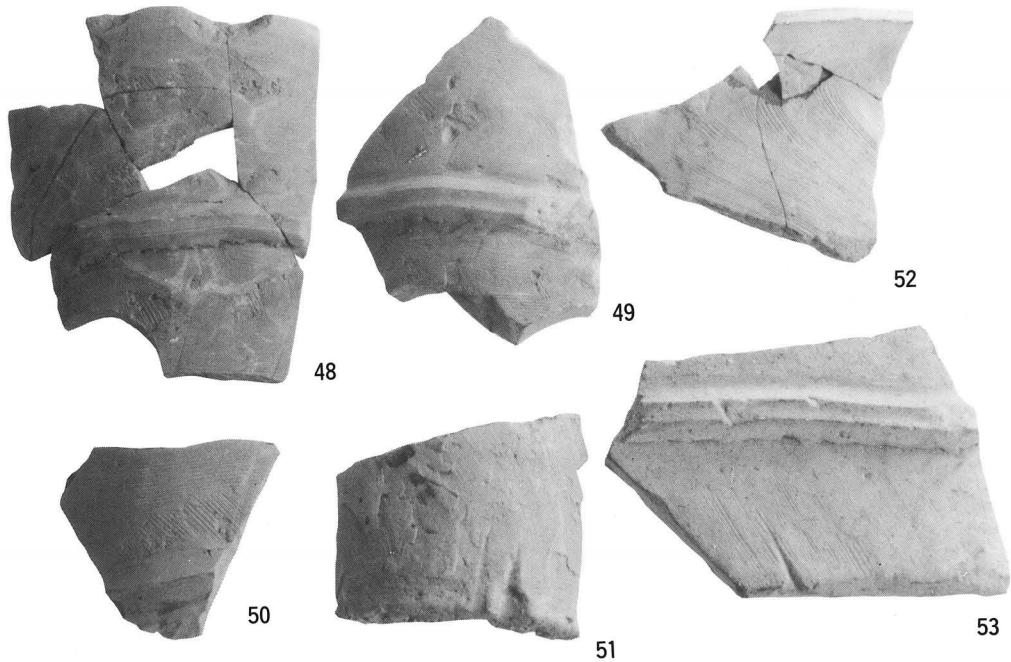


第4・5層出土土器

東弓削遺跡
(93—
298)



第4·5層出土土器



第4·5層出土埴輪



1



3



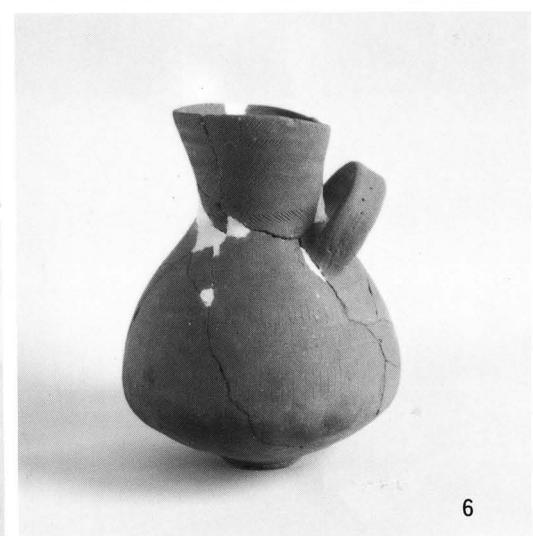
2



4.5



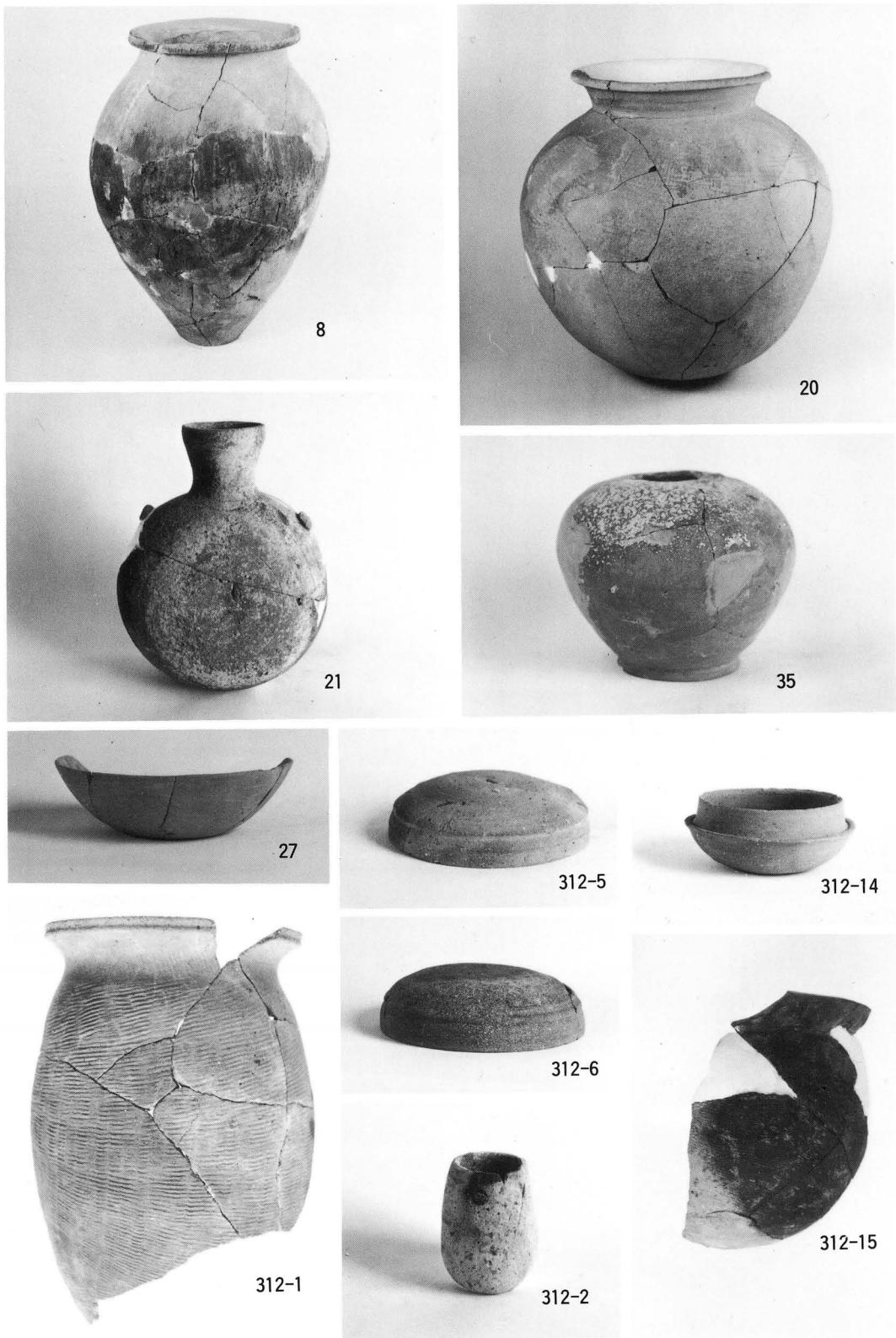
7



6

第9層出土弥生土器

図版12 東弓削遺跡（93—298）・中田遺跡（94—312）



出土遺物

八尾市文化財調査報告32
平成6年度公共事業

八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ

発行日 1995年3月

発行所 八尾市教育委員会

印刷 (株)広野印刷

